

# 一 ほたるがいつぱい

「うわあ、きれい。これがほたる。」さと子さんはおもわずさげんでしまいました。川ぜんたいが、とびまわるほたるのひかりでいつぱいになったのです。

「ね、すごいでしょ。北川町はみどりがいつぱいで、川もきれいなよ。だから、ほたるも生きていくことができるの。」

と、ゆかりさんがうれしそうにはなしてくれました。

さと子さんは、北川町のほたるがぜひ見たいとおもって、いとこのゆかりさんのいえにとまりにきています。

こんやは、そのほたるを見にいこうと、川のちかくにやってきたのです。

くらやみの中に、ほたるのふしぎなひかりがゆれています。まるでゆめのせかいにでもきたようです。

すると、一ぴきのほたるが草の上にとまりました。青白いひかりがつよくなったりよわくなったり、ほんとうにふしぎなうつくしさでした。

さと子さんはそのひかりにすいよせられました。そして、そのほたるをそうつと手のひらにのせました。ほたるは、さと子さんの手の中でひかつてはきえ、きえてはひかりました。さと子さんはそのひかりを見つめながら、このほたるをわたしのたからものにしようとおもいました。

そのとき、うしろのほうからゆかりさんとおとう

さんのはなしごえがきこえてきました。

「おとうさん、ことしもほたるがいっぱいね。このまえみんなで大そうじをしたから、川がきれいになって、ほたるもすみやすくなったのね。」

「そうだね。ほたるたち、きっとよろこんでいるよ。ほら、なかまたちとたのし



そうにとんでいるよ。」

そのことばに、さと子さんはおもわずかおを上げました。たくさんのはたるの青白いひかりのなみは、さつきより、もっともっとひろがっていました。

さと子さんは、そうっと、手のひらをひろげ、手のひらの中のはたるにいました。

「はたるさん、やっぱりみんなといっしょがいいわね。まちがえないようにおうちにかえってね。」

そのこえがきこえたかのように、はたるはさと子さんの手からとびたっていきました。

